#### LC-1A

■こちらは改良型でよりワイドレンジな特性になっている。初期型 と基本的な構造、素材は同じだが、ウーファーのエッジが動きやす い布製になり、イコライザーの役目をかねた楕円の山が7個装着 されている。また指向性の改善のためにトゥイーターの中心に金 属製の羽が追加された。初期型との再生音での大きな違いは 低域の量感がより豊かになったことで、この1AタイプからLC-1 Systemよりひと回り小さい家具調のデザインの箱のシステムが 何種類か追加されるようになり、当時のハイエンドユーザーの家 庭などにも導入されていったようだ。市場価格は40~50万円/



↑このユニットはオルソン博士が38cm口径の同軸2ウェイユニット の1号機として開発したもの。 ウーファーもトゥイーターも磁気回路が 別々の同じコーンタイプのユニットで構成されていることで、音のつな がりが同じ紙素材のため、違和感なく、まるでシングルコーンのような 鳴り方をするのが特徴。強力な磁気回路で固く厚みのあるコーン紙 のウーファーと、極めて薄い紙のコーントゥイーターからは、とてもナチュ ラルでレンジの広いダイナミックな再生音が繰り出される。特にウー ファーの完成度が高く、最近の録音ソースの低音再生にも十分反応 してくれる。とても、60年以上前に開発されたユニットとは思えない ほどだ。市場価格は40~45万円/ペア

## **Retro-Future**

古くて新しい もうひとつのビンテージオーディオ

ビンテージといえば、アルテックやタンノイ、JBL、マッキントッシュ等が 誌面に取り上げられる機会が多い。しかし、当時これらの老舗と肩を 並べる他の多くのブランドがあったことを知る人は少ないだろう。 東京、目黒にあるビンテージショップ「アトリエJe-tee」では、 音質はもちろん、デザインにもこだわった「もうひとつのビンテージ」を 数多く紹介している。本企画では、同店で販売されている 製品を中心に、毎号テーマとなるブランドを取り上げている。



RCAのフルネームはRadio Corporation of Americaで ニューヨークを本拠地としていた会社。 有名なWestern Electoric などと同じように1920年代頃からシアターサウンド を中心とした音響開発に携わり、西のWestern Electric、 東のRCAでその後に勢力を全米で争っていた時期もあったよ うだ。主にWestern Electricはシアターサウンドに力を注い でいたが、RCAはLPレコードが開発された1948年代頃から、 ラジオ局を中心とした放送分野、レコードメーカーとしての分 野にも積極的に進出するようになる。そしてその当初から開 発に電機音響工学博士のハリー・オルソン氏が携わってい たことも有名で、多くの功績を残している。また、現在でも よく使われているRCAピンジャックやRCAマイクなどは同社が 開発した機材で、そのまま呼び名になっている。

#### 本文/田中伊佐資

キャプション/岡田圭司 (アトリエJe-tee代表) 撮影/君嶋寛慶

#### LC-1 System

1946年に発表されたLC-1を搭載し たスピーカーシステムで、初期型と後 期型があり、後期型には改良型の LC-1Aが搭載されている。当時流 行っていたアールデコ調と近未来的 なデザインがマッチした奇抜な外観が 目を引く。1947年頃、ボストン交響 楽団の生演奏とLC-1システムを12 台使って再生した音の差をブラインド 試聴テストしたとき、その場のほとんど の方がいつ生演奏と録音を切り替え たか気がつかなかったことで有名に なったようだ。主に録音スタジオや、 ラジオステーション、小ホールなどで 使われていた。日本でもNHKなど多 くの放送局のスタジオにも投入されて いたようだ。

市場価格は80~95万円/ペア



### Retro-Future 古くて新しい もうひとつのビンテージオーディオ

#### MI-12188

**↓**1930~40年代はRCAとWestern Electric社との間で映画館 機材の設置で盛んに勢力争いが行われていた。その1940年代の 初め頃に開発されたシアターアンプ。出力管には6L6とほぼ同規格 でトッププレートタイプの807が4本使われており、70W出力となって いる。数あるRCAのシアターアンプの中でも群を抜いてトルクの強力 なパワーアンプで、東海岸のメーカーらしく滑らかで音場感に富み、そ して明快で分厚いサウンドは西海岸のメーカーにはない魅力を持って いる。RCAの機器はこの型番の頭にMIという型式が付くものはすべ て、プロフェショナルユースのモデルとなっていて、先述のスピーカー ユニットLC-1はMI-11411、LC-1AはMI-11411- A、BA-14Aは MI-11234、BA-4CはMI-11223という業務型番を持ち、一般機器 とはラインが分けられていた。 市場価格は35~45万円/ペア





#### **BA-14A**

↑オルソン博士がLC-1A Systemのモニターアンプとして開発し たパワーアンプ。出力管にはRCAが最初に開発したといわれて いるメタル管の6L6 (1622) が2本使われ、出力が12Wで音質を 重視したA級動作で設計されている。小出力ながら力のあるアン プで、モニターアンプらしい繊細で中域の情報量に富んだ特性と なっている。このアンプの後面には左右8個の平行ピンが出て おり、本来は総型の大きなラックにビルトインされて設置されていた。 また、このモデルの初期型でBA-4Cという型番のアンプがあり、 同じ12W出力で回路設計も使われている真空管もほぼ同じ仕様 となっている。2台のアンプの音質の差はほとんどないが、若干 後期型になるBA-14Aの方がワイドレンジな特性になっているよう だ。 市場価格は45~55万円/ペア

になった。 ど ないので、 モデルである。 先攻がM このスピー 、それらは次回にまわすことにゃに出すのは拙速かつもったいある。コンシューマー機をここ どちら ンプ2台を聴き比べる 甪 らもプロフェショナル・ノ2台を聴き比べること シの 2 のア 1 り『ヒーズ・ファンプである。は力がな

すでに設置しているスピーカーカを象徴するかのように輝いていっ赤なロゴが、往時のグレートた れる造形なのだろうなる。これがミッドなー1システムもグレー リダの富豪からようやく込んだ冷蔵庫のようだ。 レート感がみなぎってッドセンチュリーと呼ばっか。時は50年代、ころうか。時は50年代、ころりームを1岁 人手できたと Ŕ

りぴりこだわるオー

を す聴いていたい。編集者が窓際の日だま しているのは、音が冴えているのにまる しているのは、音が冴えているのにまる で聴き疲れをしないということ。ひねも で聴き疲れをしないということ。ひねも で聴き疲れをしないということ。ひねも らくまぶたを閉じているようにい。編集者が窓際の日だまをしないということ。ひねもは、音が冴えているのにまる 61  $\mathcal{O}$ サウン `

このボーカルがものの見事でか。話ができすぎのようのセリフのような安定感ができっくりそのまま出てくがそっくりそのまま出てくい布団にくるまったようなばいになる。 リフのような安定感がある。・。話ができすぎのようだが、..ボーカルがものの見事に重厚し まま出てくる。あったっぷりとしたト な安堵感で まったか

知らなかった。それはすごい。とんち格を作った巨大企業なんですね」格を作った巨大企業なんですね」の規格を作った巨大企業なんですね」の規格を作った巨大企業なんですね」といる。

を作ろうということで開発した。こちくだからスピーカーにマッチしたアンくだからスピーカーにマッチしたアンくだからスピーカーにマッチしたアンはいになる。

せっ

こちら

んかんな連想はここで姿を消し、知らなかった。それはすごい。

絶大な信頼感が深まった。

真空管の真

いる。

細かい音を拾う。採寸までした特注ハンまるで関係なかった。もっと優等生的で、まるで関係なかった。もっと優等生的で、かない。だが、実際のところこの数字はの出力は、シアター月のころに

11-12188は、じっくいりマッチしている感じがす

袋のようにスピ

り使

い込ん

る。

ならば

としっ

RCAといわれて、は はソニー・ロリンズはぱっ はソニー・ロリンズはぱっ はソニー・ロリンズの ニ

いとしない

かっ

たが、

の『橋』だ。これにと思い

あの映



#### SV-1 (MI-12150)

◆このシリーズ唯一のプリアンプでモノラル設計となっている。基本的にはパワーアンプから電源の供給を受ける設計になっているため、 SP-10、SP-20とセットで使うことが前提となる。 大きさはかなりコン パクトながらパワーアンプの魅力を最大限引き出すその再現能力は目を見張る物がある。生産台数がとても少ないアンプで滅多にペアで お目にかかることがなく、シリーズ中で最もレアな製品。市場価格は 20~25万円ペア



#### **SVP-10** (MI-12198)

★とてもコンパクトなボデイーにラインセレクターとメインボリューム、高域、低域のトー ンコントロールの4つのつまみが付いているライン入力専用のモノラルプリメインアンプ。 ビーム管6V 6による2本のプッシュプル動作で10W出力となっている。 くせのない滑 らかでツヤのある音色は小音量でも音楽を楽しませてくれる。 市場価格は18~22



#### SP-10 (MI-12190)

↑出力管にビーム管6V 6を2本でプッシュプル動作させた 10W出力のモノラルアン プ。主にhigh-fidelityシリーズの20 ~ 30cmのスピーカーを鳴らすことを目的として 製作されたようだ。質の良いUTCのトランスが使われ、音は出力管6V 6の特徴であ る切れ味の良い中低域と美しい高域の音色が良くマッチする。市場価格は30~

## **Retro-Future**

古くて新しい もうひとつのビンテージオーディオ

ビンテージといえば、アルテックやタンノイ、JBL、マッキントッシュ等が 誌面に取り上げられる機会が多い。しかし、当時これらの老舗と肩を並べる他の多くのブランドがあったことを知る人は少ないだろう。 東京、日黒にあるビンテージショップ「アトリエJe-tee」では、

音質はもちろん、デザインにもこだわった「もうひとつのビンテージ」を 数多く紹介している。本企画では、同店で販売されている 製品を中心に、毎号テーマとなるブランドを取り上げている。



RCAは50年代に入ると放送局や映画館などのプロフェ ッショナルラインと平行して、その高い技術力をふんだん に盛り込んだ high- fidelity (ハイフィデリテイー) と呼 ばれるシリーズが発表する。とても目を引くブルーの塗装 でまとめられた同シリーズはコンシューマー用のニーズに も対応することも目的として設計されているため、一般的な居住空間でも高い音楽の再生能力を発揮してくれ る。また、トップラインのモデルはプロラインに用いられ るMIナンバーが付けられている。なお同シリーズのライ ンアップはあまり多くなく、また生産台数も少なかったた め入手が難しいのが残念なところである。

#### 本文/田中伊佐資

キャプション/岡田圭司(アトリエJe-tee代表) 撮影/君嶋實慶



SP-20 (MI-12191)

high-fidelity シリーズの中でも大型の30~38cmの スピーカシステムを鳴らすために設計された、シリー

ズ最高クラスのパワーアンプ。3個のUTCトランス

が搭載され、ビーム管6V 6を4本でパラレルプッシュ

プル動作させた20W出力のモノラルアンプとなって

いる。重心が低く安定感の良い低音と、美しくすきっ

と伸びた中高音は大型のモニタースピーカーも十分

### Retro-Future 古くて新しい もうひとつのビンテージオーディオ



★25cmのフルレンジユニットで、録音スタジオなどの小型業務用モニタースピー カーとして使われていた。とても大きなアルニコマグネットと軽くて反応の早い コーン紙が採用され、美しい音色で明快な中高音、厚みのあるパンチの効い た低音は有名なWE のフルレンジユニット755A、728Bを上回る魅力がある かもしれない。市場価格は18~25万円ペア



#### 501-S1/SL-123 (MI-12654)

★30cmの同軸型ユニットで、非常に小さいボイスコイルのウーファーに3インチのコー ンタイプのトゥイーターが搭載されている。ウーファー部分はほとんどフルレンジとしても 使えるくらい再生能力に優れているため、トゥイーターとのつながりがとても良く、再生音 はまるでシングルコーンスピーカーが1発で鳴っているかのよう。この2タイプはフレーム のデザインこそ違うが、ウーハー、トゥイーターは全く同じ物が使われていて再生音も聴 き分けがつかない。ちなみに前号で紹介した38cm同軸型モニタースピーカー LC-1も 後期型のLC-1Aからhigh-fidelity シリーズになる。市場価格は18~25万円ペア



MI-12448

★25 ~ 30cmタイプのユニット専用の家具調デザインのキャビネットで、比較的薄い 12mm合板で造られていて、小柄ながらも低域再生能力に富み、立体感のあるスケー ルの大きい再生音は目を見張るものがある。大きめのバッフル面に厚みが薄いボディー と足付きのデザインが特徴で、ユニットとのマッチングが絶妙に箱をうまく共鳴させる。 箱の強度が弱いためかコンデション良く残っている箱が滅多にないのが残念。市場価 プロ機はどのソ からソプラノ からタイ

リーま、もちろんRCAのLは50年代中期の製品で20W。行司を務のコンシューマー機はSP-20°こなどで活躍し の『呪われた夜』

1などなど。 も前に迫ってく 行司を務め - 20。これ - 方司を務め ノの独唱、『カ

対決してみましょうということで、聴き が決してみましょうということで、聴き などで活躍し、出力が70Wもある。 88から始まった。1940年代、脚さて聴き比べはプロ機のMI-12 さて聴き比べはプロ機のMI-12 前回のプロフ 3回のプロフェショナル機に続いで痛感したのはそのことだった。たとなる今回、「アトリエ Je‐ワ いいのか。RCAアンプ編の第管球アンプをお安く一括りにし ーにも向けられた「ハ と、これはあまりによろし青いちゃうことがある。よいなフレーズを陳腐と思いいなフレーズを陳腐と思いいなフレーズを陳腐と思い ーズを聴く。 Ĺ ならば いて、 トレとしう点で、僕の好みはSP-20である。店主の岡田圭司さんは「たいした球を使っているわけではないんですけどねえ……」と首をひねっている様子すらうかがえる。つまり回路サードかりして、 マウントしたものだ。生ギターのようなをショップのオリジナルキャビネットに Aの2ウェイ同軸501S1(30㎝径) ここでスピーカーを替えてみた。RC ングルコー 締まった歌声が、

りしているということのようだ。

感覚で板をわざと響かせるように設計さ

したメロディ・ガルドーの『マイ・いる。アンプはSP-20に固定し、

-ン一発のような、・スリル』を鳴らし

のような、小さく引き』を鳴らしてみた。シ

さくさくっと軽やかに

。キャビネットの背面が心地ンビネーションが一際いいよ このすがすがしさには名スピ のほの の背面が心地好く共

2 0 は楽器の質感を丁

細かな表現ができる。

V

りがあるし、

・スの間

ピアノそのものを近くで聴いている感じノ・ソロはホールの空気込みではなく

回 を紹

91 analog





#### **RCA Photophone LMI-32216**

塗装されたシャーシに四角い角が丸まった大きな3つのトランスが目を引くデザインとなっている。 使用され ている真空管はKT66 X2、EF86 X2、GZ32 X1を搭載しており、当時BBC指定のモニターアンプであっ た 英国 Leak 社の TL/12 パワーアンプと良く似た構成で、出力を12Wにおさえた音質重視の設計になっ ている。音質はクセの無いとてもバランスが良く取れた中域音の再現性が豊かなアンプである。

# **Retro-Future**

古くて新しい もうひとつのビンテージオーディオ

ビンテージといえば、アルテックやタンノイ、JBL、マッキントッシュなどが誌面に取り上げられる機会が多い。しかし、当時これらの老舗と肩を並べる ほかの多くのブランドがあったことを知る人は少ないだろう。 東京、目黒にあるビンテージショップ「アトリエJe-tee」では、音質はもちろん、 デザインにもこだわった「もうひとつのビンテージ」を数多く紹介している。 本企画では、同店で販売されている製品を中心に、 毎号テーマとなるブランドを取り上げていこう。

## RCA Photophone

米国でGEの関連会社として創立された RCA社が1927年頃に英国市場に向けて 設立した会社であり、1957年以降はRCA Britain Ltd. となる。社名からもわかるように 映画や音響の研究開発、その機材を生産 する会社だった。当初はプロ用の音響機器 のみを生産していたが、1955年頃には欧米 での一般家庭においてのオーディオ市場の 拡大にともない民生用のハイファイオーディ オのラインアップとなるLMIシリーズの生産 が始まる。商品構成はあまり多くなくプリアン プ、パワーアンプ、チューナーをそれぞれ1機 種のみとスピーカーが数種類あった。

#### **RCA Photophone** LMI-32215

1955年から1959年までの5年間のみ生産されたモノラルプリアンプで、電源スイッチを入れるとRCAの赤いロゴマークが光輝くとても美しいパネルを持って いる。電源部を持たないため、パワーアンプとの接続から電源を供給してもらう 方式なっている。 真空管はEF86 X1、ECC81 X2が使われ、フォノイコライザー もLP用が2種類、SP用が2種類用意されている。1957年以降のパネルデザ インは若干変更され、表記もNew Orthophonic High Fidelity となり、型式も



本文/**田中伊佐資** 

製品解説/岡田圭司(アトリエJe-tee代表)

### Retro-Future 古くて新しい もうひとつのビンテージオーディオ



**RCA 82 B Monitor Amplifier** 

1940年代にアメリカで録音スタジオや放送局での使用を目的に生産されたプロ用パワーアンプ。シャー シにはパワートランス、チョークトランス、アウトプットトランスの3つが中央に配置され、それらのトランスを囲 むように真空管やコンデンサー、ホーロー抵抗などがレイアウトされている。使われている真空管は 1622 (6L6G)×2、1620(6J6)×3、5U4×1 と前述のLMI-32216と良く似ていて、その米国製真空管仕様 アンプとなっている。といってもこちらの方が開発年代が古くLMI-32216 の原型といえる。出力も出力 管6L6が2本で12Wと音質重視の設計がなされていて、当時のWestern Electric 124 パワーアンプも 良く似た使用目的とアンプ設計となっており、同レベルのパワーアンプだったと思われる。

## RCA Photophone Ltd.

が出てジャズっぽい。 あるが、どことなく端正で品がある リオによるコペンハータはケニー・ドリュー 先攻の英国RC

が活躍した場所と時代がリンクするビーCAがぼくの好みだったが「スピーカー全体を通して取り」 ホエア」がかかると英国製 -ルの歌声

た。多少の製造時期が違うものの、同らはちょっと古く40年代後半に製造さ 引き続き登場してもらうことになっ 英米のお国柄がどう出るか興味深い 6と同じ仲間の6L6G。 が作ったアンプに関し E 8 2 BBCモニタ 166を使 3 2 2

クラシックの交響曲となると弦の響き

アンプのトーンがしっくりくる。粋な歌手でいて欲しいので、ここルはわりとさらっと聴いていた

勝負の米国

い英国に対して濃い

がのっている。極端にいえばソリッド はど新しいので、それがそのまま音に岡田さんは「製造時期は英国製が数りしているというふうにも受け取れ ペラの歌声もやはり同じ声という意 · ] しれない」 ない」と語った。

うのは珍しいことらには程度がここまでい

で勝負する eには前回の る米国 ジスのアルト



#### アームとプラッター

右横に装着されている大きな 鉄製のアームは標準装備の ク重田である。



33 2/1 RPM or 78 RPM 切り替えレバー。 モーターの回転を止めた状態でのワンタッチ 切り替えが可能

キャスト製でプ

れている

ラッターの上部

こはフェルトが張

天板と足下部分は木製で正面の扉と外側まわりは全て鉄製 となっている。色は初期のLC-1等のスピーカーユニットや MI シリーズのアンプ類と同じカラーリングで塗装されている

## **Retro-Future**

古くて新しい もうひとつのビンテージオーディオ

ビンテージといえば、アルテックやタンノイ、JBL、マッキントッシュなどが誌面に 取り上げられる機会が多い。しかし、当時これらの老舗と肩を並べる ほかの多くのブランドがあったことを知る人は少ないだろう。 東京、目黒にあるビンテージショップ「アトリエJe-tee」では、音質はもちろん、 デザインにもこだわった「もうひとつのビンテージ」を数多く紹介している。 本企画では、同店で販売されている製品を中心に、 毎号テーマとなるブランドを取り上げていこう。

## **RCA**

#### 16"ターンテーブルの世界②

前回に続けてRCA社製 TYPE 70-D 16" アナ ログターンテーブルをご紹介しよう。今回はその初 期モデルにあたるもので、とても希少なダイレクト モータードライブ駆動のターンテーブルである(前 回ご紹介したのはリムドライブ式)。当時、ダイレク トモータードライブターンテーブルは、Prestoや fairchild、scully 社などでも生産されており、そ の正確でトルクのある回転により、ブルーノート盤 にもヴァンゲルダーが好んでレコードカッテイング 用に使ったことで知られている。

#### 本文/田中伊佐資

製品解説/岡田圭司(アトリエJe-tee代表) 撮影/小林幹彦(彩虹舎)

#### **RCA 70D**

1930年代頃にラジオ局、スタ ジオ用に開発されたプロ用の ダイレクトドライブターンテーブ ル70-typeの最終型で、50年 代後期まで生産された。前回 紹介したリムドライブ式の回転 方式とは 比べ物にならないコ ストがかかるダイレクトドライブ 方式を採用している。駆動方 式はワンモーターのギア・ドラ イブとなっており、33 2/1と 78回転に対応。当時は72D record cutting attachment を搭載させて、レコードカッテイ ング用のターンテーブルとして も使われていた。



16" ターンテーブルの世界②

#### Retro-Future 古くて新しい もうひとつのビンテージオーディオ



RCA 70-D 内部。ギアドライブ用のRCA 製モーターと重量級のフライホイール、キャビネットの内側には吸 音用と思われる厚みのあるフェルト材が張られている

#### RCA TYPE 70-D 当時のカタログ



Type 72-D Recorder Mounted on a Type 70-D Turntable

シグが転がることによって33回転 は常に78回転で回り、 ロボ し込まれて るのは難し

**るで金庫のようなトビラを開けると、** いんじゃないか。 中に装着しているフラ プラッターに向かって重し、くつがえった。そこから極太シャフ で据え付けられている。 同にベアリングが押し込まれつかの輪っかが組み込まれて はデカイぞとおんなじことを書 があるため通称ギア・ 光景が待って いるらし ジするモ 、本体側に同心円状にteeの岡田さんがプ 回転したらマジで危 このタイプは横軸で 11 がごっ 40m越えプ -ルがこれ の概念 る 弦の響き ナガンの 実に退屈な演奏だ。 イエスタデイズ」 ので、 でとした低音をジェンセンが吐きだし、に退屈な演奏だ。 いきなりブハーと かしこの で、ポール・チェンバきなのをかけてくださ

るモ

と呼ばれて

に圧倒される。

ミー・フラ

も思いっきり張り出し、続くロリンズのヴァ

べてが想像以上だっ おそるべき余裕、

0)

ース弓弾きオ がしょぼ

いと

で始めてみた。

冒頭

0)

『 うわ

Ø S P 置くところがな 恋激しながら、 明い にこんなひばり って 。すごいリアリティ。声やていかれた。例の「港町13日も大トリだった美空ひば いよく迫って , 2 , v

原始人の石器のようだ。程度がいい個体で、し

い調整

モノラル盤を聴いていく。 ・レイ108とGEバリレニ

レラ

ロインチ・ A チ の プ



モーター

優秀で信頼性の高いEAD製が搭載されていて、立ち上がりの速いスムーズな 回転でコントロールされている



MI-11833-C キャビネット

ほとんどの部分は木製で足の先には高さ調整のツメが付いて いる。正面の扉が前に開くようになっていて、中にイコライザー アンプなどの搭載が可能



プラッター 外側の直径は45cmもあり

シャフトの太いアルミダイキャ スト製の重量級



MI-11895 アーム

RCA は16" ターンテーブル用のアームも数種類生産していて、こちらはアームの中程が上に折れ曲がる使い やすいタイプになる

# **Retro-Future**

古くて新しい もうひとつのビンテージオーディオ

ビンテージといえば、アルテックやタンノイ、JBL、マッキントッシュなどが誌面に 取り上げられる機会が多い。しかし、当時これらの老舗と肩を並べる ほかの多くのブランドがあったことを知る人は少ないだろう。 東京、目黒にあるビンテージショップ「アトリエJe-tee」では、音質はもちろん、 デザインにもこだわった「もうひとつのビンテージ」を数多く紹介している。 本企画では、同店で販売されている製品を中心に、 毎号テーマとなるブランドを取り上げていこう。

#### **RCA** 16"ターンテーブルの世界

RCA社といえば1920年代頃からシアタ ーサウンドを中心として音響開発に携わ り、現在でも通用する スピーカーやアンプ をこのコーナーでも紹介してきた。また、同 社はアナログレコードの分野でもRCA Victorレーベルを1929年に立ち上げてか ら1985年頃まで生産している。今回はLP レコードが開発された1948年代頃から RCA が業務用に開発した超弩級の16" アナログターンテーブルを紹介しよう。

#### 本文/**田中伊佐資**

製品解説/岡田圭司(アトリエJe-tee代表) 撮影/小林幹彦(彩虹舎)

# **RCA BQ-2C**

1950年代にラジオ局やスタジオ用など に開発されたモデル。この前にBQ-2B というモデルがあったが、上部の本体 部分はほぼ同じながら、キャビネットのデ ザインが一新され、有名なLC-1Aスタジ オモニタースピーカーの流れを持つ美し いデザインになった。16インチ(40cm) のプラッターはシャフトが太いアルミダイ キャスト製の重量級で、プラッターの内 側に装備された33、45、78回転の3 個のアイドラーで回転をコントロールし ている。モーターには優秀で信頼性の 高いEAD製を搭載。また、アームも RCAが生産しており、機種によっては フォノイコライザーも装備されている。



#### Retro-Future 古くて新しい もうひとつのビンテージオーディオ



33、45、78回転用の3個のアイドラーが搭載され、回転をコントロールする



RCA BQ-2Cのラベル



RCA BQ-2Cの当時のカタログ

になった。 はない あるから、 る存在だっ **そこに目が行くの 全気で考えなかっ** 見た瞬間、 、プラッターに大きな幅の越えであるから30㎝径のL を終え、さっそく聴かせて 海を渡ってきた何台かのう はるかにぶっといシャフトプラッターを外して裏返す らじわじわと注目されてきて、 P盤が小さい 自分のプ 」と率直に思うだろう。 お以 É いほど回転は安定す か響く。この音が再生空ーを岡田さんが指で叩ん **わいそれと入手できるメ** 以上前の業務用プレーヤ どんなにへそ曲が 写真で見ることがあって A 社 の T Y ようにも見えてくる。 なっ がまとめて入ってき」とジラされること。 まさに知る・ ログ かしここ数年 んてことは誰も のことを思う LPを載せる 分余日ができ もらうこと の太さに感 Е りでも B Q とい もので 人ぞ知 から、

ペイジやビング・クロスビーの声がやわらと出てくる。大きな物量によって得たらと出てくる。大きな物量によって得たらと出てくる。大きな物量によって得たいでも撮影を担当している小林幹彦さい音も余裕たっぷりに風のようにさらさい た。近くににあったガラードを叩っかを装をしてある木製だった。写ったがないから当たり前った。近くになった。なけれど。 と驚いている様子れは違いますねえ 声だった。 シュアーM44 **"**ナッ ぞれの回転 B Q I は違いますねえ」と小林さんもちかく、そして抜群の安定感がある。 式とは異なる。 33 ムはRC リカだな、 13番地」。 転ごとにプ 丰 RCAのMI-11895と な聴いてみた。高い音も低 キング・コール&ジョージ・ チという超ロング・タイプで、 チという超ロング・タイプで、 19. これでは、 19. これでは、 19. これでは、 19. これでである。 なにかにつけて、往下で、 大っ腹だな、 そこの。 なにかにつけて、往下で、 大っ腹だな、 そこのに、 19. これでは、 1 回転のために合計387イドラーは78回転、1 CAの16インチでひらうすぐ二十歳の歌をうすぐ二十歳の歌 少なから 写真で見

高 音も低音も余裕 た

つ

ぷ

# TWIN POWER LOUDSPEAKER APPLICATION

1952年当時のカタログ

# **Retro-Future**

古くて新しい もうひとつのヴィンテージオーディオ

ヴィンテージといえば、アルテックやタンノイなどが誌面に取り上げられる機会が多 い。しかし、当時これらの老舗と肩を並べる、他の多くのブランドがあったことを知る 人は少ないだろう。ビンテージ・ショップ「アトリエJe-tee」では、音質はもちろん、デザ インにもこだわった「もうひとつのヴィンテージ」を数多く紹介している。本企画では、 同店で販売されている製品を中心に、毎号テーマとなるブランドを取り上げている。 今回はRCAが1950年代に開発した大型ホーンタイプのシステムを紹介しよう。

#### 本文/田中伊佐資

製品解説/岡田圭司(アトリエJe-tee代表) 撮影/小林幹彦(彩虹舎)

#### 第43回 **RCA**

1930~50年代頃のアメリカは西海岸 のハリウッドをメインとしたWestern Sound Electric 社と東海岸のN.Y.を 拠点とする RCA 社が革新的な音響シ ステムを開発して映画サウンドを支えて いた。当時は観客動員数が日々大きくな り、それとともに劇場も大型な規模になっ ていったため、スピーカーシステムも Western Electric 社 のミラフォニック システムや RCA 社の Ubangi システ ムなどの超大型タイプが開発された。

#### MI-6264-B

1950年代に開発された Twin-Power Loud speaker と表された大型ホーンタイプのシステ ム。キャビネットは縦横1mくらいの木製で正 方形のバックロードホーン型。正面中央にア ルミ製の円錐状のホーンと1.8インチの大型ド ライバー、その後部に38cmウーファーを後ろ 向きに搭載した同軸タイプの2ウェイシステム になっている。ウーファーとドライバーは他の RCA システムにも使われている機種であるが、 円錐状の金属ホーンと大型の特殊な構造の キャビネットはこのシステム専用に開発されて いる。当時は使われる会場の大きさなどで縦 横に数個スタックして使われていたようである (写真の下の専用台は特注で製作したもの)



RCA/MI-6264-B

#### Retro-Future 古くて新しい もうひとつのビンテージオーディオ



「MI-9548」ドライバー。 フェノリック樹脂製の1.8イ ンチ振動板を持つRCAの 大型ドライバーで Weste rn Electric 社の594ドラ イバーに対抗して開発され たフィールドタイプ。 RCA MI-1443ドライバーのアル ニコタイプとして数多くの 当社のシステムに装備さ れている



「MI-6264-B」の ホーン &ドライバー。 円錐ホー ンの直径は43cm、長さ は37cm、ドライバーを 装着すると全長は約 50cmとなる

「MI-6264-B」の正面中央ホーンの中心部に2重の円錐状のアルミ製ディフューザー

が装備されている。低音はホーンの上下左右のスリットからドライバーの真後ろに後方向

きに装着されたウーファーからバックロード形式で前に放出される設計になっている。この

タイプのキャビネットは他社にも例がなく、独創的なスピーカーシステムを他にもいくつか開

発してきた RCA らしい超大型のオールホーン型の同軸スピーカーシステムである

「MI-9449」 ウーファー。38cm口径でコルゲーションタ イプコーンのフィックスエッジウーファーである。ボイスコ イル系が2インチと38cmウーファーとしては比較的小さく フルレンジ的な鳴り方をする。こちらもフィールドタイプの RCA MI-1444 ウーファーのアルニコタイプである

映画館の音がすると率直に思った。 とではあるのだが。 ム・ホーン・トゥ」。 ンが音を放射状に飛ばす ・はヘレン のサウンドではなく のスピ カ トロの段階で、 ーじゃない ルの定番曲

用兵器(中央から光線を照射するメーサ に使われていたらしく、会場が広ければ この個体はラスベガスのショウで実際いいという思いに直結している。いて、それはすなわち、目茶苦茶カッ れに合わせてスタッ 殺獣光線車)を拝むような気分になっ 昭和の東宝特撮映画に出てくる対怪獣がするのかまったく想像できない。僕 何段も積み重なって 6264は以前からア ったいどんな

とを敢行するなと感じ入る。 るとRCAという会社は途轍もないこ ている様子を想像ックしていたらし )のもデザ まあ、

ンやサイズからいって、、を個人の部屋に収めると とんでもないこ 気がこちらに伝わってくる。非常に豪勢れる。ハリウッドの広大なスタジオの空ドル楽団の調べにシナトラの歌声が包まだ。長年伴奏を務めてきたネルソン・リク・シナトラの「夜のストレンジャー」

な録音であることが伝わる。

現はどうなのかといったチェックだ。ト豪快なサウンドは得意としても繊細な表

ハの無伴奏チェロがしめやかにかかる。

ここでまったく雰囲気を変えて、

いているようで音像がきっちり締まってゥイーターとドライバーの同軸配置が利

なお、僕が試聴時したすぐ後にMI-まった。対怪獣用兵器とか言ってごめん。 進力一本槍の音ではなかった。いる。業務用スピーカーにありがちな突 材でぜひその正規コンビの音も聴きたい またまた音楽ジャンルを変えて荒井 振りかに聴いて、ジーンとなって「卒業写真」。描写がていねい。 かに聴いて、 の専用アンプがア

かす感じ。音を前に飛ばす圧が高い。そくハマる。部屋の空気を隅から隅まで動グバンド・ジャズも思っていた通りうまトン6』から「酒とバラの日々」。ビッ エリ

うでなければ会場のお客さんは満足させ

同じような感想を抱いたのは、

フラン

音圧と高い描写力にジッ対怪獣用兵器、とか言 とか言って

179 analog







#### **RCA MI-4256**

RCA社が1933年に高音質な音響アンプ用に開発した直熱3極管2A3は当時アメリカで音質の高 い評価を得ていた。その数年後、これに対抗するWestern Electric 社も直熱3極管に着手し有名 な300Bを開発。シアター用に300Bを2本搭載した86型アンプの生産が始まる。RCAも負けじと、 300Bより先に開発して好評を得ていた2A3を2本搭載した MI-4256パワーアンプをシアター用とし て発売した。 搭載されている真空管は左から 59、2A3、2A3、80、83の順。 今回のアンプには入 カ段にバッファー用としてシャーシー右端に56真空管が搭載されている。

## **Retro-Future**

ヴィンテージといえば、アルテックやタンノイなどが誌面に取り上 げられる機会が多い。しかし、当時これらの老舗と肩を並べる、 他の多くのブランドがあったことを知る人は少ないだろう。ビンテ ージ・ショップ「アトリエJe-tee」では、音質はもちろん、デザイン にもこだわった「もうひとつのヴィンテージ」を数多く紹介している。本企画では、同店で販売されている製品を中心に、毎号テー マとなるブランドを取り上げている。前回はRCAが1950年代に 開発した大型ホーンタイプのシステムを紹介したが、今号ではこ のスピーカーと同時代のRCAの貴重な3極管パワーアンプ、MI-4256とプリアンプ、SV-1を紹介しよう。

#### 本文/田中伊佐資

製品解説/岡田圭司(アトリエJe-tee代表) 撮影/小林幹彦(彩虹舎)

#### 第44回 RCA/2A3

1930年代までに RCA はビーム管の6L6、6V6、6F6など現在にい たるまで数多くのオーデイオアンプに使われてきた真空管を開発して いた。そして、これらを開発した数年後にさらなる音質の向上を目指し て開発チームが作られ、直熱3極管の2A3が完成する。この2A3はそ の後に開発される有名なウエスタンの300Bの基礎となった。これら直 熱3極管の音質はすばらしくいまだに西(western Electric)の 300B、東 (RCA)の2A3としてオーデイオファンを楽しませている。



1920年代から始まったアメリカにおける映画産業の盛り上がりは各メーカーの熾 烈な音響機器の開発競争になっていく。ニューヨークに本拠地を構えるRCA 社と カリフォルニアにある Western electric 社はシェアを2分して争っていた。1930 年代になると音響機器のレベルもかなり高くなり、現在でも銘機とされる音響機器 が完成していく。そんな時代にRCAが自信作として開発していたシアター用アンプ の一つがMI-4256であった。音色の生々しさで定評のある同社が先に開発した 直熱3極菅である2A3出力管を2本搭載した出力10Wクラスのパワーアンプとなる。

#### Retro-Future 古くて新しい もうひとつのビンテージオーディオ





#### RCA SV-1 / MI-12150

1950年代に入って、RCAがハイエンドコンシューマーとプロの現場でも使えるグレー ドのHifi Fidelity Lineとして開発された唯一のプリアンプである。そのため業務用 の MIナンバーも付けられている、通常RCAのパワーアンプはシアターやスタジオで 使われるため専用のミキシングコンソールでコントロールされる。このため、コンシュー マー的なプリアンプは開発されていなかった。ちなみにWestern Electricにもコンシュー マー的なプリアンプは存在しない。とてもコンパクトなボデイにメインボリューム、入 力セレクター、高域、低域のコントロールのみのシンプルな構成で、パワーアンプの 素質が余すことなくスピーカーに再現される。





前回は前号で紹介、RCAが 1950年代に開発した大型 ホーンタイプのシステム「MI-6264」で試聴を行った

アトリエJe-teeではパワーア ンプ「MI-6264」専用の -ケースをデザイン。 ホーンス ピーカー「MI-6264」とテ イストを合わせている



## RCA/MI-4256 & SV-1

当のホントは好きではない なくたなびかせた声を聴くとや な音量で流れてい · の 「 バ eに入ったとき、 のかもと思

**則回登場したRCA社のステー** 岡田さんが「いやあ、 RCAが作っていた3極管の高級ア その歌声を発しているスピ 残念。 その取材のと

でにこのコンビの音で、ラスベガスの。いきなり耳にしたクリス・コナーは 今回そのアンプであるプリのSV すぐ手に入るんだけど、 とは思えないジェント と組ませることが実現し 4256が入荷して、 「夜のスト へ飛ばして のだろう。 間に ルな れないが、 のチェロ 染みる。 九の っぱりこれは名録音だな」と思った。のデビュー盤が流れたとき、咄嗟に んぜんレトロ感満載の音ではない。といまりは、ヴィンテージ・システムでもぜ ンではないので、 もう一度ヴォ しめの録音 僕が好きなら 無伴奏ソロ。 ーンなのだ。

イではな

が M I

せる奏者の気迫や説得力を感じさせた。 しばらく聴いて い雰囲気で聴けたのはバッ ルではない音と言う カルものに戻って坂本 その道に精通して 僕はクラシッ った感想が浮 いたいと思わ クフ

アンプの力が大きい

ウンドだが、

な質感 ドランドの子 は

アンプで使ってい る 2

『エラ&ルイ』 と岡田さんは がなく

耳をつんざくようなや

かましさはなく

だから

-分にある。

いわけではなり



#### MI-6395 Horn

黒鋳型で造られたアルミ製の折り曲げ型 ホーンで500Hz 以上の再生音に対応して いる。この形状はドッグレッグホーンと呼ば れている。ゴルフの用語としても用いられるドッ グレッグは"く"の時に折り曲がった様子か ら名づけられたようだ。左右の120度ほど の開口部と折り曲げホーンから出る間接音 が独特な臨場感がある。



LMIプレート。 RCA Photophon Ltd. Lon don と記載された下に RCA CORPORAT ION OF AMERICA と本社名が入っている



MI-12424 キャビネット

38cmユニット専用に開発されたバスレフ構造の木製キャビネット。数種類のユニットの組み 合わせがあり、38cm フルレンジュニットをはじめ、内部に小型のラジアルホーン&ドライバー と38cmウーファー MI-12432 を搭載した LS-1 システム。 最上位は MI-6395 / 9548 ホーン&ドライバー と38cmウーファー 9449 を搭載した ホーンシステムとなる。

# **Retro-Future**

#### 古くて新しい もうひとつのヴィンテージオーディオ

ヴィンテージといえば、アルテックやタンノイなどが誌面に取り上げられる機 会が多い。しかし、当時これらの老舗と肩を並べる、他の多くのブランドがあ ったことを知る人は少ないだろう。ビンテージ・ショップ「アトリエJe-tee」で は、音質はもちろん、デザインにもこだわった「もうひとつのヴィンテージ」を 数多く紹介している。本企画では、同店で販売されている製品を中心に、 毎号テーマとなるブランドを取り上げている。今号では米国製とはひと味違 う英国RCAのホーンスピーカー・システムを紹介しよう。

#### 本文/田中伊佐資

製品解説/岡田圭司(アトリエJe-tee代表) 撮影/小板直樹(彩虹舎)

## 第46回 英国 RCA photophon Ltd. London

RCA はアメリカで1920年代に GE (ジェネラルエレ クトリック社)の子会社として誕生した。1927年には 映画サウンドシステムを主な業務とする RCA Phto phon Inc を設立。当時シェアを争っていた Western Electric と共に世界の映画産業の発展に大きく貢 献することになる。その後、英国ロンドンに RCA Pho tophon Ltd. London が設立され、RCAの欧州での ビジネスが開始する。また、この頃には Western Electric London も設立されており、欧州では 英国 のVitavox、ドイツのKlangfim などとともに劇場シス テムのシェア競争が進んでいった。



#### MI-6395 Horn Speaker System UK

すでにシアター用に開発されていたMI-9548ドライバーとドッグレック型折り曲げホーン MI-6395、 当時スタジオモニター用に開発された 38cmウーファー専用キャビネット MI-12424を採用したモ ニタースピーカー。 UK タイプには LMI-9449 ウーファーが搭載されている。 この後期型は高域 に紙の振動板を持つトゥイーターが追加されている。高性能なシアター用のドライバーを搭載した 本格的な小型モニターシステムで、折り曲げホーンが採用されているため、近距離での再生音にも 立体感がある、当時の RCA がレコード制作などでの録音の現場に向けた意気込みを感じる。

ョンの振り

#### Retro-Future 古くて新しい もうひとつのビンテージオーディオ







#### LMI-9458 ドライバー

英国とアメリカで共通のシアター用の大型ドライバーで同じマグネッ トと振動板が搭載されている。フェノリック製振動板が採用され、 これはシルクに樹脂のようなニスを塗り固めたもの。 Jensenや Electro voice などの中域音、高域音のユニットにも採用され ている。アルミ等の金属素材のタイプと比べると、より滑らかで 陰影に富んだ再生音が特徴である。



トゥイーターは紙製の振動板でかなり大きなマ





#### LMI-9449-Aウーファー

英国 RCA で独自に開発された 38cm ユニットである。かなり重量のあるアルニコマグネッ トを搭載していて、振動板はアメリカタイプ 9449 と比べるとコルゲーションが無く、エッジ にはダブルサスペンションタイプを採用。フルレンジに近い特性である。外装は塗装やフレー ム、マグネットは全く違う形状をしていて、Tannoy、Goodmans 等の英国製 ユニットによ く見られる形状のフレームと似ているので、英国内でのOEM 生産だと伺える。



フェノリック製振動板

## 英国RCAのホーンスピーカー

# 英国RC の

かで整理できていないから、

ますますこ

では柔らかなテナー

ーサックスが左右レーンの『バラー

一間の

そのふっ

。ジョン・コルトレーンの20度と開口部が広いホー

「この素材はウ

という

を使っている。米国製ですら頭のな

カーは英国RCAのユニ

企業の全貌を掴むのが難しい。そのス

きれいにレストアされてい

とも言うべき赤いフロ

い香りがする音なんですよね。

ヴォ

いんです。

そのあたりか

リルが印象的だ。とても華やかだ。

スカー

RCA社は巨大なエレ -ルだった。 ク

確かにおっ しゃる通りです ル な キン

いってみます か と岡田さんはナッ ロニクス企 ホ

に寄与している感じがする。省スペーそして直角に折れ曲がったホーンもくらとした音の形状が快い。 チューン。この旋律と伙同ことっ、ミズキ」にはやられた。まさにキ ら拡散されているためか耳にやさし 意味で設計されたのかもしれないが、 エラ&ルイ、 ングと声物が続き、 この旋律と歌詞にたっぷりと オを忘れていたのに、この名 からの音が一度ぶつかって かり消え去った。 一青窈の このスピ 11

きちんと数えたわけではないが、 ったいどんだけ製品を作っていたのだ 大きさがわからなくなってくる。 かもマランツだったら何番とかタ A社の製品と遭遇する確率が しているのではなく、 掘れば掘るほど、 宝の 定のラ を実感した。 田さんがしばしば言う とのつながり

、まるでコンシューマーニーンが思い浮かばない。、があり、いかにもプロ用 の振動板がア 樹脂製だからだろう。 ルミではな

音は甘

を払拭させる



LC-6Aの内部写真。家庭用にも最適な家具調のデザインで、ハの 字型の木製の足が採用されている。キャビネットは奥行きが薄いタイ プで全体は12mm厚くらいの薄い米松材で構成されている。再生音 は搭載ユニットサイズに比べて大きめのバッフルサイズが採用されてい るため、共鳴効果もありキャビネットの大きさ以上のスケール感がある。

LC-6 スタジオモニタータイプ。業務用の小型スタジオモニターとして 開発された。こちらの箱もバスレフタイプでサイズも家具調のLC-6A とほぼ同じだが、バッフルは正面の枠から6個のネジで固定されている。 可搬用タイプとして箱の横に取っ手の付いた仕様も開発されていた。 こちらには内部後面バッフル面に吸音材が貼られている。

# **Retro-Future**

#### 古くて新しい もうひとつのヴィンテージオーディオ

ヴィンテージといえば、アルテックやタンノイなどが誌面に取り上げ られる機会が多い。しかし、当時これらの老舗と肩を並べる、他の多 くのブランドがあったことを知る人は少ないだろう。ビンテージ・ショッ プ「アトリエJe-tee」では、音質はもちろん、デザインにもこだわった 「もうひとつのヴィンテージ」を数多く紹介している。本企画では、 同店で販売されている製品を中心に、毎号テーマとなるブランドを 取り上げている。今号はRCA社で人気を博したコンパクトなフロア 型のスピーカーシステム「LC-6A」のホームオーディオ仕様とスタジ オモニター仕様を紹介しよう。

#### 本文/田中伊佐資

製品解説/岡田圭司(アトリエJe-tee代表) 撮影/小林幹彦(彩虹舎)

#### **RCA**

RCA社 は1920年代頃からシアターサウンドを中心とした音響機器開発 に携わり、その後は全米において西のWestern Electric 社、東のRCA 社として勢力を争っていた。Western Electric 社は主にシアターサウンド に力を注ぎ、RCA 社は LPレコードが開発された1948年代頃からスタジオ 録音やレコードメーカー、そしてラジオ局、テレビ局を中心とした放送分野に も積極的に進出。全米を席巻する巨大メーカーとなる。



RCA LC-6A

1946年に発表されたRCA を代表するLC-1 の数年後に、家庭用高級シス テムとして開発されたもの。薄い板で構成されたバスレフタイプのキャビネッ トに 25cmフルレンジュニット MI-6333 を搭載していて、先に開発された LC-1 のようなワイドレンジな原音再生を狙った再生音ではなく、レンジは少し 狭いが音楽の本質をしっかり再現するタイプのシステムである。

かさっぱり

#### Retro-Future 古くて新しい もうひとつのビンテージオーディオ



#### MI-6333-C

B、Cは後継機種としてほぼ同時期に 開発されている。磁気回路は初期型 と同じだがコーン紙は録音ソースのワイ ドレンジ化に伴いコルゲーションがあり、 エッジはダブルサスペンションのストレー トタイプを搭載。低音再生がより豊か になっている。後期になるとトゥイーター が追加され、かなり現代的なソースに も適応するポテンシャルを持つシステ ムとなっていた。



#### MI-6333

に開発していた小型フルレンジユニットシリー ズ WE-754、WE-755、WE-756に対抗し TRCA 社が開発。25cm 口径の深い頂 角を持ったコーン紙を搭載したユニットであ る。初期型のMI-6333 はかなり大きなア ルニコマグネットにコルゲーションの無いカー ブドコーン紙が採用されている。また、ボイス コイル系が1インチとこのサイズのユニットと してはかなり小さく、RCA らしい音楽的な再 現性の高いユニットになっている。

#### MI-6333-B

B タイプは主に可搬式スピーカーシステム用として開発されたもの。 長い ケーブルを箱の内部に収納した時にユニットにケーブルがあたってダメー ジを与えないようにユニットフレームの隙間が狭くデザインされている。なお、 Cタイプのフレーム、Bタイプの磁気回路は初期型と同じタイプである。

Western Electric がモニタースピーカー用

RCA/LC-6A

エンクロ 局域を伸ばすのは難しい。 岡田さんは「モノラルで聴く場合、 部屋の中央に1個だけ置いてあるスピ いけるのではないかと想像できた。 の技術では作れない、軽くて薄く、 般的にはこのサイズのフ ーには同じユニットが装着している。 とやるときれいに響く 板厚は12㎜と薄かった。手の甲で、ロージャーはきれいな木目の家具 ああなるほどなと思った。 2

レンジも

が高音は強調されずに

も一貫して品がいい 同田さんは「RC チェロのボディのと 、銀のエンクロージャー・タニクリフによるバッ のように響 と言ってい いるよう の時

は帯域の狭さが気になって、みにしていた。昔だったら、 はなめらかに耳へ入ってくる。 を聴きたいとき、 鼠域も欲張らない、 型番など細かいことは訊かずに楽し発ですと聞いていて、例によって敢 心に余白を残して、それとなる。 に乾燥したこの振動板なら わからなかったが、 優れたフルレンジの音 ある種の引きの美学 かるようになっ 例によって敢いシングルコー だがおそらく を感じる。 無伴奏ソロは、銀のエンク /イド。業務用らしいフラットな音だ。 /などの伴奏は左右に広がり、レンジ/ 時流に左右されてない、

米国人の前オ 様と比較試聴することができた。ステレオで用意されていて、モノ スタジオモニタ を収めたスピーカー **番末尾にCが付いたユニッ** テレオのため当然のごとくオそのLC-6Aで同じソースな 決めを汲み取ることができる。 しさもなく、「いまさはないが、同時こりにこういうことだみたいなことになったいなこと」といっていることになったいなことになっている。 を足して2ウェイで聴いていた。 ナーは同じRCA製ト ーだ。これは左右2台の Aで同じソースを聴くと、 333は改良を重ね、 がLC-6Aという モノラ -ケスト